

幻の冬季オリンピック札幌大会に向けてのスキー振興

新井 博¹⁾

The progress of Japanese skiing for the Visionary Sapporo Winter Olympics

Hiroshi ARAI

Key words : Sapporo, Olympics, Ski

キーワード：札幌，オリンピック，スキー

はじめに

昭和15年の夏季・冬季オリンピック大会の日本開催が決定していたにもかかわらず、幻の大会となった。しかし、日本では開催の約10年も前から、大会の招致と成功にむけて、国を挙げて準備を進め、競技力向上や組織作りにおいて、大きな成果をあげることが出来た。

ここでは、メダル獲得を期待された全日本スキー連盟（以下、スキー連盟）による競技力の向上が、如何に実施されたのか、スキー界に限定して解明する。

当時、日本のスキー界はヨーロッパやアメリカに比べるとまだまだ新興国であった。だが、冬季オリンピック（以下、オリ）といっ

た世界トップの祭典を開催する計画で、ホスト国として如何なる振興を実行したのかわかにかにすることで、現在に生かせる教訓を拾い出すことが出来よう。

昭和3年からIOCで札幌大会開催が決定する昭和11年までのスキー連盟による振興について（図1）、各年度の様子を明らかにする。

第I部 国際水準への引き上げ期（昭和3-6年）

昭和3年夏季オリ・アムステルダム大会で、日本の陸上・水泳界は躍進し、織田や鶴田が金メダルを獲得していた。一方、スキー界は同年冬季オリ・サンモリッツ大会へ、初めて5名の選手を送ったが最高位24位と振るわず、世界との大きな差を見せつけられた。

1) 昭和3年のスキー連盟の意識

スキー連盟の稲田会長は大会を振り返り、今後世界の一流国になることを宣言した。「選手の持ち帰った研究の成果によって、今後ますます発展し、最も近き将来において世界の一流なること^{ママ}を我々一同協力して努力すること固く決心せんとするものである」（稲田, 1928）。

2) 昭和4年外国人コーチ・選手の招聘

早速、スキー連盟は秩父宮と大倉男爵の力

年	1928 昭和 3年	1929 昭和 4年	1930 昭和 5年	1931 昭和 6年	1932 昭和 7年	1933 昭和 8年	1934 昭和 9年	1935 昭和 10年	1936 昭和 11年
	国際水準への引き上げ期				オリンピック開催準備期			決定	
競技力向上	第2回オリ・サンモリッツ	ルウェーのコーチ・選手の招聘	ハンネスシュナイター来日		第3回オリ・レイクプラッシュト組織統一	オリンピック選手合宿	オリンピック選手合宿	オリンピック選手合宿	第4回オリ・ベルリン
大衆的向上				野沢温泉スキー講習会			文部省省講習会教科スキー導入		

図1. オリンピックまでのスキー振興（新井）

1) 生涯スポーツ学科

添えを受け、スキー王国ノルウェーからジャンプ台に詳しいコーチと優れた選手を招聘した。昭和3年12月から昭和4年3月までヘルツェットコーチとコルテルードとスネルスルード選手が来日した。

(1) 昭和4年ヘルツェットらの影響

彼らは東京から北海道にかけて多くの人々にノルデックスキーに関する指導を行い、特にスキージャンプ競技に飛躍をもたらした。(稲田,1929)

3) 昭和5年ホルメンコーレン国際大会参加

昭和5年3月ホルメンコーレンの国際スキー競技会に麻生が1人参加した。成績は振るわなかったが、ノルウェー選手や監督・コーチと親睦を深め多くの情報を得て帰国した。

4) 昭和6年スキー連盟の意識

稲田会長は「これまで国際大会に連盟は2度日本選手を参加させてきた・・・国内での水準も上がり『優勝・入賞』を実現するという点に意義がある」と述べている(稲田,1932)。

(1) 昭和6年全国スキー講習会の開催

昭和6年に文部省とスキー連盟は、長野県野沢温泉で全国スキー講習会を無料で開催した。全国から200名を超える教師・指導者・学生が参加、振興に大きな効果を発揮した。

(2) 昭和6年「スキー指導要領」

文部省體育課は河本禎助博士を委員長とし、稲田、小川、麻生、中川、泉、川上、出口の7氏で日本的スキー促進のために「スキー指導要領」を作成した(文部大臣官房體育課,1931)。

(3) 昭和6年オリ派遣選手合宿練習会

昭和6年3月15日から3月24日まで、長野県菅平において第1回オリ派遣候補選手の合宿練習が実施された。参加者：10名 監督：麻生武治 トレーナー：矢沢武雄。

第Ⅱ部 開催準備期 (昭和7-10年)

1) 昭和7年のスキー・スポーツ界

昭和7年冬季オリ・レイクプラシッド大会

で日本はジャンプで8位、18キロでは12位となり、北欧には及ばないが中欧勢を抜いた。一方で、陸上、水泳界は昭和7年夏季オリ・ロスアンゼルス大会で合わせて7個の金メダルを獲得するほど躍進していた。

(1) 昭和7年「オリ・優勝計画」樹立

皇紀2600年を記念したオリ開催に向けて日本体育協会と東京市が始動。昭和6年12月東京市会は「オリンピック東京大会開催に関する建議」を可決し、国をあげての運動となった。

(2) 昭和7年オリ・優勝計画の中身

スキー連盟は、以下のようにオリ・優勝計画を樹立した。「実力を更に愈々益々充実させ発揮させる計画である。真摯なる実力ある選手の養成、競技種目の選択、競技場の完成、その他衆智を合し傾け尽して厳格なる計画、及び規律に基づける厳格なる練習を着々進行さす可きである」(スキー連盟, 1932)。

(3) 昭和7年組織的な改革の実施

連盟は振興のために組織改革を実施した。①決議権の改正・・・甲乙丙団体。②役員組織の改編・・・代表委員、庶務委員、技術委員、大会役員。③負担金の改正。④神宮体育会に加盟し全国的統制。全日本スキー選手権大会と明治神宮大会の統一実施。全国大会の統一。全国的に連盟への加盟促進。

2) 昭和8年オリ・優勝計画2年目

スキー連盟は2年目について「オリンピック優勝計画の第2年目を迎ふ。何年計画と云ふ期限を定めての事業にあらざるも、最も近きオリピアードにおいて『必ず優勝』なる覚悟と準備こそ必要なれ。学生選手のスウェーデン行計画具体化す。学生選手においては世界的に断然たる強味を有する我が日本、清水、逸見、伊黒、栗山、木越、四谷、竹内ら七選手の奮闘祈る」と述べている(スキー連盟, 1933)。

(1) 昭和8年臨時技術委員会

2月10日臨時技術委員会開催し、本年度より北海道で練習合宿を開催することを決定し

た。今までは各県単独で練習したが、来年度より統一して行う。4月3日第10回代表委員会が開催され、技術委員会の権限が決まり、その中にオリ・優勝計画が盛り込まれた。優勝計画は①組織的合宿練習を為す。②昭和9年若しくは13年に北欧選手を招き対抗競技を行う。③派遣費の調達を今から考慮する。

(2) 昭和8年ホルメンコーレン大会参加

昭和8年3月ホルメンコーレン50周年大会に大野博士と栗谷川選手と宮村選手が参加した。目的は①選手としての選手強化の成果確認、②大会会場の視察であった。競技結果は20～40番台と不振。しかし、国際的協力関係構築と国際競技や用具の知識を深めた。

(3) 昭和8年オリ・優勝計画合宿

スキー連盟は、昭和8年3月22日から札幌の延命園で第1回合宿を1週間開催した。基礎的な練習からレースまでを行った。距離班と飛躍班に分けて指導を行った。

3) 昭和9年オリ・優勝計画3年目

スキー連盟は、3年目について次のような意識であった。「いよいよ一九三五年の秋には大学オリンピックの遠征・・・次の冬季オリンピックに対する練習と準備はこのシーズン一期のみです。オリンピック制覇をめざす我等の選手諸君過去三シーズンの実をこの一期に結んで下さる様に、何より自愛と奮闘を願います」(スキー連盟, 1934)。

(1) 昭和9年ヴィンゲンの万国学生大会

昭和8年スイス・ヴィンゲンでの国際学生スキー大会とガルミッシュの視察に宮川監督、事務監督三澤、選手7名が参加した。1-3月までの長期遠征で、目的は①学生スキーの実力を示すこと、②次期オリ大会地視察。結果は世界学生の中で上位に入る。②大会地を詳しく視察し、委員と接触できた。

(2) 昭和9年全国スキー指導者講習会開催

昭和9年1月3日長野県菅平の「文部省菅平体育研究所」が誕生した。早速、1月4日から10日間全国的なスキー指導者養成講習会が開催された。講習会ではスキー理論と実習

の講習が行われ、最後にスキー指導案作成やクリスチャニア・テレマークの使用法について試験を行った。

(3) 昭和9年オリ・優勝計画合宿

3月20日から1週間札幌近郊の不老閣で、スキー連盟と北海道スキー連盟が合同で、1週間約40名の精鋭選手を集めて合宿を行った。距離班と飛躍班に分け、高橋と秋野により指導が行われた。

4) 昭和10年冬季オリ・ガルミッシュ・パルテンキルヒェン参加

スキー連盟は、この年について次のような意識であった。「四年間待ったオリンピックがやってきた。スキー一等国への入学試験の機会である・・・今回オリンピック委^マ出場以外に昭和15年の日本における冬季オリンピック開催についての準備に関し特に重大なる責任を持っている。」(スキー連盟, 1936)

(1) 昭和10年冬季オリ・札幌開催準備

具体的な招致準備項目—①ドイツ冬季大会で必ず良い成績をあげる。②札幌における競技場の設備の紹介。③組織、設備、記録統計などに関するパンフレット作成、絵葉書、アルバム、活動フィルムによる宣伝など。④札幌の気候、風土、文化施設、交通などの紹介。

(2) 昭和10年全国スキー指導者講習会開催

昭和10年1月7日から1週間長野県菅平の「文部省菅平体育研究所」で全国的なスキー指導者養成講習会が開催された。講習会は規則正しい生活で、スキー理論と実習の講習が行われ、最後にスキー指導案作成やクリスチャニア・テレマークの使用法の説明があった。

(3) 昭和10年オリ・候補選手鯉川温泉合宿

昭和10年の3月10日から29日まで、ニセコ近くの鯉川で強化合宿実施。強行スケジュール。朝7起床、朝・午後の実習、夕食後の座学、10時消灯。選手全員の意識が高まった。

まとめ

スキー連盟は、「国際水準への引き上げ期」に外国人招聘や全国的講習会を開催し、昭

和7年の第3回冬季オリ・レイクプラシッド大会で一定の成果を上げた。

スキー連盟は、「開催準備期」に国家的なオリ招致の運動と連動し「メダル獲得」を掲げ、組織的強化・トップ選手強化・全国水準の引き上げを実施した。

オリンピック開催寸前までの全力でのスキー連盟による振興が、その後の日本スキー発展を支える組織的・計画的な基盤を作り上げたと言えよう。

参考文献

稲田昌植 (1928) 巻頭言. スキー年鑑, 7:1.
稲田昌植 (1929) ヘルセット中尉一行より得たる

教訓. スキー年鑑, 3:1-2.

稲田昌植 (1932) オリンピック選手を送る. スキー年鑑, 5:1-3.

文部大臣官房體育課 (1931) スキー指導要綱, pp.1-104.

全日本スキー連盟 (1932) オリンピック優勝計画の樹立. スキー年鑑, 6:3.

全日本スキー連盟 (1933) 巻頭言. スキー年鑑, 7:1.

全日本スキー連盟 (1934) 巻頭言. スキー年鑑, 8:1.

全日本スキー連盟 (1935) 巻頭言. スキー年鑑, 9:1.